

## 事象を価値づけ、わかりを高め合う社会科学習 ～合理的意志決定力を育てる～

---

---

### 1 これまでの研究の経緯

本校社会科部は、昨年度までの研究「学びをひらくカリキュラムの創造」において、社会科で学びをひらく姿を、社会事象や成員相互との双方向的なコミュニケーションを通して、合理的で妥当な社会を創りだしていこうとする姿と捉えた。そして、社会科において育てるべき中核的な力を「社会的コミュニケーション能力」<sup>1)</sup>と仮説的に設定し、客観的・科学的認識の形成と民主的態度の育成を両立させた社会科教育の構築をめざした。つまり、子どもたち一人ひとりが民主主義の担い手であるという立場から、個人の意志決定にとどまらず、社会事象をもとに集団での討議の中で、よりよい社会のあり方を求めて合理的な意志決定を行うことをねらったのである。

具体的には、子どもの学びの文脈に即した問題解決過程や、指導と評価の構造化という視座から、社会的コミュニケーション能力を育てる手立てを明らかにしようとした。その結果「価値判断場面の導入」や「自己評価活動の重視」を単元のなかで行うことが、社会的コミュニケーション能力を発揮する上で、有効であることが確認できた。また、社会的コミュニケーション能力の高まりの姿を仮説的に4つの段階に設定<sup>2)</sup>し、高まりを見取るための評価活動の改善（評価の枠組みの見直し・評価道具の工夫）についてもあわせて取り組んできた。そして、社会事象をもとに自分の主張を構成し、価値判断していくという学びを積み重ねることが、子ども個々の認識や社会的思考力・判断力を育成するために重要であるとわかった。

しかしながら、コミュニケーションという言葉が非常に広義であり、漠然とイメージされるため、能力の中身に対する曖昧模糊とした印象を与えたことは否めない。そこで、「社会的コミュニケーション能力」のコミュニケーションを通して育てるべき能力の中核に合理的意志決定力を据え、焦点化して研究を進めることにした。また、授業を展開カリキュラムとして捉える<sup>3)</sup>と、一時間一時間の授業へと研究対象が回帰することになった。本年度は、確かなる知が発揮されるであろう具体的な授業イメージを「事象を価値づけ、わかりを高めあう社会科学習」としてテーマに反映させ、これまでのカリキュラム研究を踏まえ、研究を進めることにした。

### 2 「事象を価値づけ、わかりを高め合う」社会科授業とは

近年、「知」の創造は、共同体の関係による産物である<sup>4)</sup>と言われ、多くの仲間や地域社会の人々の支

えなくして、問題解決活動は進まないとされる。あえて、わかりやすく言うならば「みんなの中でよりよく生きていく知恵をうみだすこと」や「自分や友だちのよさを生かし、共に生きていくこと」という公民的資質の育ちが重視されているのである。つまり、社会の成員全員が社会形成に参加する民主主義の原理にもとづいた社会科教育として、多面的に思考し公正に判断する能力が重視されているのである。

テーマにある「事象を価値づけ、わかりを高め合う」とは、子どもと社会事象との関係性の変化をつくり出すことである。子どもは社会事象と出会う時、その子なりの既有知識や経験知をもとに事象に対する意味づけ価値づけを行う。そして、追究場面や価値判断場面における他者や社会とのかかわりを通して、事象への個人的な意味づけから社会的な意味づけへと昇華させ、事象を価値づけていく。このように、それまで不明だったり曖昧だったりした社会事象が自分との関係を持ってくる。それは子どもを取り巻く社会とその子との関係が変わってくることを意味している。こうした一つ一つの事象への意味づけ価値づけを通して、社会のしくみや人間の営みが子ども個々の中で内面化され理解されていくものと考えた。わかりを高め合うとは、社会認識の発達を意味し、子どもが獲得する知識の量的質的拡大と情報を再構成する認識の質的变化をうみだしている状態を指しているのである。教師はこのような授業イメージを大切にしながら、子どもの学びを探っていくことで社会科における確かなる知が育まれると考えた。これまで本校社会科部が求めてきた客観的・科学的認識の形成と民主的態度の育成を両立させた社会科教育の構築の一層の推進が求められていると言えるであろう。そして、社会科における確かなる知の中核として、本年度の研究より合理的意志決定力をおいたのである。

このような社会科における確かなる知の高まりは、図1に示すように、既有の知識・方法をもとにして、内容的な側面である「社会認識」と能力的な側面である「価値判断力（社会的思考力・判断力）」の両側面がスパイラルにかかわり合いながら、総合的な力として高まっていくと考えている<sup>2)</sup>。

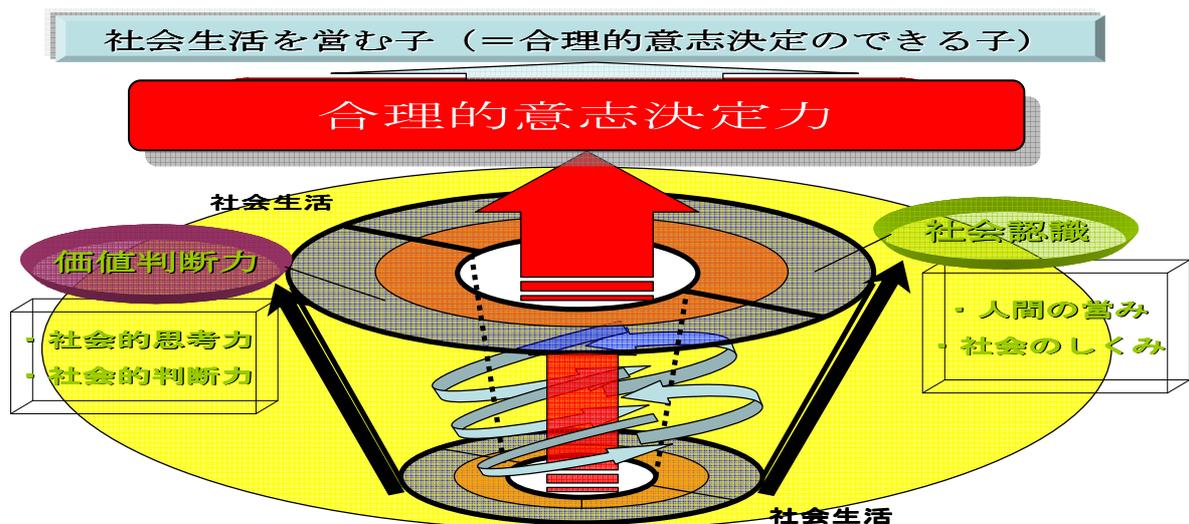


図1. 合理的意志決定力の構造図

「社会認識」とは、子どもの内面に形成される社会事象に関する知識体系であり社会科固有のものであ

る。すなわち、社会生活の様子やしぐみがわかることであり、人間の営みに関する内容と社会のしぐみに関する内容がある。価値判断場面において、根拠となるべき具体的な学習内容を含んだものである。

「価値判断力」とは、社会的思考力と社会的判断力を総合した力と考える。具体的には、社会事象を弁別・比較・類推・洞察し、事実判断から価値判断していく力である。価値判断場面において、合理的な意志決定に導いていくための社会認識と社会的で批評的な吟味にもとづく選択・決定の力と捉えている。

私たちは意志決定を行う際、事実認識のみにもとづいて意志決定しているわけではない。事実認識は同じであっても、価値観が異なれば人によって問題の捉え方が違ってくる。つまり、事実認識に加えて価値認識が意志決定には大きな影響を及ぼす。社会科学習において、成員相互のかかわり合いを一層深め、子ども自身のより主体的な学び合いの場を重視することで合理的意志決定力が高まると考えている。合理的意志決定力は、自らが社会を形成する成員という立場に立ち、これらの「社会認識」と「価値判断力」を活用しながら、合意に向けて主張と討論を繰り返す中でより望ましい社会形成をめざす能力である。このように自己や他者、社会事象との双方向的コミュニケーション（対話）を行う中で、社会科における確かなる知が形成されていくと考えている。

### 3 「確かなる知」を育む社会科授業の留意点

確かなる知を育む授業は、事象に対する意味や価値を成員相互と視点を交換したり共有したりするなどの学び合いの中で、意味形成の場を重視している。具体的な授業イメージである「事象を価値づけ、わかりを高めよう」社会科学習を具現化していくための授業改革の留意点として、「子どもの問題意識の重視」「合意をめざした価値判断場面の設定」「メタ認知的な学び方の促進」の以上3点を考えた。

#### (1) 子どもの問題意識の重視

子どもの学びの文脈を重視し、これまで以上に、子ども自身が問題を設定したり、考えをつくりあげたりしていく活動を重視するということである。認識は子ども個々の思考の中で成立するものであるから、個人の主体性が重要である。子どもたちの主体的な追究を通して、個別的で具体的な知識から説明的・概念的知識へと高めることで、学ぶ対象に対する実感的な理解が得られるようにする。子どもの生活経験や知的好奇心について、対話や表現物から探りながら、問題解決学習へと仕立てていく。つまり、学習過程の要件として、次の2点を大切にしたい。そのためには、①子どもが学ぶ価値を見いだすような社会事象を用意すること、②直接体験・疑似体験などを取り入れ、社会事象に深くかかわらせることで、よりよく生きていこうとする人間の姿を見いだしたり、社会事象への意味づけ価値づけをしたりするのである。

中学年単元「安全な暮らし」を具体例として説明する。まず、子どもたちの経験知から「火事」に対するイメージや概念を引き出すことにした。体験したことを話し合ったり、イメージマップをかいたりすることで素朴な疑問がでてきた。しかしながら、火事の一般的な様子や印象など火事を外から眺めるだけの一面的なイメージに留まった。そこで、教師は火事発生件数や被害状況、被害額などの具体的なデータ資

料を提示したところ、「もし我が家が火事だったら」、「消防士さんはおそろしくないのか」など、子どもたちの視点が複数の立場からの視点へと具体化された。そして、消火活動や安全な暮らしに対する疑問や思いが多数だされた。それらをカテゴライズする中で、「火事から生活は守られているのか」という問題意識を単元の柱として学習を構成していった。また、消防士さんに聞いてみようという意識の高まりから消防署・消防団見学を取り入れるようにした。このように、既存のイメージや視点を広げる教師の働きかけから生まれる子どもの問題意識を重視するのである。

## (2) 合意をめざした価値判断場面の設定

実際の社会では、無数の価値判断場面があり、絶えず批判と調整を繰り返しながらある一定の結論を導き出している。しかし、その結論は一方的に正しいという判断ではなく、常に吟味し修正されるものである。このようなことから社会科授業においても、子どもが直面する問題場面に対して、自己の価値のぶつけ合いから集団討議を経てよりよい社会や合意をめざして議論する価値判断場面の設定を行う。価値判断場面での合意は合意することがめあてではなく、合意をめざす過程にこそ合理的意志決定力が育成されると考えている。価値判断場面には、協働思考（コラボレーティブ・シンキング）を伴う仲間や教師との対話が不可欠である。価値判断を行うとき、事象の解釈や理解を子ども同士や教師と子どもで批判、検討し合い、共同で事象の意味形成を行っていく。その際、既存の概念を繰り返し利用することで概念自体を再構成させ、既存知識や新たに習得した知識を用いて、比較、関連、類推するなどして、事象の意味を捉えていくわけである。そして、子ども自身によって発見、創造されることで、実感をともなった理解に結びつくと考えた。このような学習が、社会に生きる人々が様々な問題に立ち向かい、よりよく問題を解決しながら社会の維持、向上に努めていくことを体験する場であるとも言えるだろう。一人ひとりが自分の責任において、自分たちの社会を吟味・批判できるようにすること、このことが、子どもにとっても意味ある学びになっていく。

下図は、価値判断場面における教師の留意点である。実際、価値判断場面の設定は難しく、必ずしも適切とは言えない場合もある。実践の中で、子どもの学びを探りながら修正し、有効性を検証している。

価値判断場面設定における教師の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>○合意を前提としていること。(解決へ向けての方向性を見いだす)</li> <li>○テーマが明確であること。 ○考えが分かれること (基本の立場は2つ)。</li> <li>○留保条件などで互いの論点を限定する中で相互に折り合いながら最終的に意思決定をしていく。</li> <li>○討論する中で、多様な価値観や考えを出し合い、それぞれの意志決定プロセスを模索する。</li> </ul>
価値判断場面設定における教師の働きかけ
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 主張や結論は何か。その主張の根拠 (事実) は何か。主張と根拠 (事実) とのつながりは何か。 (ツールミン図式の活用)</li> <li>② 自分の考えと比べて、納得できる点と納得できない点は何か。</li> <li>③ どの点を変えたらもっとよくなったり、納得できたりするのか。場面に応じて、働きかけていく。</li> </ul>

## (3) メタ認知的な学び方の促進

合理的で妥当な意志決定を導くには、自らの学びを対象化し、客観的に捉えていくことが重要である。これまでの研究においても自己評価活動を重視してきているが、目標に照らして、何がどこまであきらか



ハーバーマス著「公共性の構造転換」未来社 2005年  
桑原敏典著「小学校社会科改善への提言～市民的資質の再検討～」(日本文教出版)2004年  
小玉重夫著「シティズンシップの教育思想」(白澤社)2004年  
片桐雅隆著「自己と語りの社会学～構築主義的展開～」世界思想社 2003年  
「学ぶこと・教えること～学校教育の心理学～」鹿毛雅治・奈須正裕編著(金子書房)2001  
「社会科教育事典」日本社会科教育学会編(ぎょうせい)2000  
「自律の復権」岡田敬司著(ミネルバ書房)2004 ・「シティズンシップの教育思想」小玉重夫著(白澤社)2004